

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市芸術文化協会	
施 設 名	京都芸術センター	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業	
内定額（総額）	9,420	(千円)
公 演 事 業	4,622	(千円)
人 材 養 成 事 業	4,798	(千円)
普 及 啓 発 事 業	0	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	KAC Performing Arts Program2018/Cotemporary Dance	2018年8月17日、2019年1月25日～27日他	①出演：Hyslom、振子ぴじん、はっとりともか他 ②出演：アオキ裕キ他 ③出演：下村唯、藤本茂寿ほか	目標値	450
		京都芸術センターフリースペースほか		実績値	731
2	KAC Performing Arts Program2018/Music	2019年2月22日～24日、3月17日	①出演：中川裕貴 ②出演：中村圭介、田中遊、山田岳ほか	目標値	400
		京都芸術センター講堂ほか		実績値	361
3	KAC Performing Arts Program2018/Cotemporary theater	2018年6月30日、7月1日、10月16日～17日他	①出演：かもめマシーン ②出演：250km圏内 ③出演：BRDG他ほか	目標値	200
		京都芸術センター講堂ほか		実績値	193
4	KAC Performing Arts Program2018/Traditional Performance 継ぐこと・伝えること	2018年11月17日、2019年2月11日	①出演：柳亭小痴楽 ②出演：中村壱太郎ほか	目標値	200
		京都芸術センター講堂		実績値	275
5	ニューイ・ブランシュ KYOTO「Myriam Lefkowitz」	2018年10月5日、9月28日	出演：レフコウィッツ、ラポルテ	目標値	100
		京都芸術センター 和室「明倫」ほか		実績値	978
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,350
				実績値	2,538

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	Co-program2018	2018年4月～2019年3月	笑の内閣、MuDA、Ensemble FOVE、荒木優光、神里雄大、武田力、渡邊朋也、増田美佳、柳生二千翔他	目標値	700
		京都芸術センター 他		実績値	1,049
2	KAC Performing Arts Program2018/演劇計画Ⅱ～戯曲創作～	2018年9月1日～2019年3月23日	松原俊太郎、山本健介 平倉圭、大森望、篠田千明、佐々木敦、森山直人、松本悠他	目標値	120
		京都芸術センター ギャラリー北・南他		実績値	1,270
3	伝統芸能文化創生プロジェクト	2018年11月18日～12月23日、2019年2月3日他	芳友会、中組獅子舞、東京鹿踊、綾傘鉾囃子、俵木悟、森田玲、井口はる菜、小林昌廣	目標値	400
		京都芸術センター 講堂、大広間他		実績値	583
4	アートマネジメント研修プログラム	2019年2月9日、10日	講師：増山士郎ほか	目標値	20
		興聖寺ほか		実績値	27
5	フィリップ・ドゥクフレダンスワークショップ	2018年7月10日～12日	講師：フィリップ・ドゥクフレ、ジュリアン・フェランティ他	目標値	30
		京都芸術センター 講堂		実績値	35
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,270
				実績値	2,964

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

京都芸術センターは、京都市における文化芸術の中核的な拠点施設であり、「文化・芸術が都市の活力を生み出し人々の心豊かな生活を可能にする」という信念のもと、それらを実現するための活動を行っている。その具体的な方策として、①芸術家の制作・発表活動を支援する。②芸術文化の情報のハブとして機能する。③さまざまな芸術ジャンルの融合だけでなく、芸術や学問や産業が交差する場とする。また、芸術家同士が刺激しあい、芸術創造を通して、多様な出会いと交流を可能にする。という3つの柱を同時に実行しながら、自由で活発な芸術交流の拠点として活動していくことが、京都芸術センターに求められる社会的役割である。*資料1

上記のミッションおよび、方策に沿って、事業を実施することができた。特に、公演事業および人材養成事業では、①③を念頭に置き、20～30代を中心とした今後が期待される芸術家と協働し、ジャンル横断型の創作、公演を行った。②については、本補助事業以外の事業等で対応している。*資料8

要望書からの大きな変更はないが、成果の数値化および考察については、2018年年度末および2019年度はじめに事業が集中したことで現在も進行中であり、今後も継続して実施していくことが重要と考える。

当施設は、20～30代で構成する専門知識をもった6名のアートコーディネーターと3名のプログラムディレクターが企画会議をもつことで、アーティストの選定、企画のブラッシュアップを図り、事業を実施している。事業の着眼点を20～30代のスタッフにすることで、若手芸術家と同世代にたった企画提案を可能とし、芸術家の創作を幅広く支援しようとしている。事業を通して芸術家にどうなってほしいか、どういった創作を望むのかをスタッフ間で話し合い、何度も事業意義や効果を確認しながら実施したことは大きな意義があると感じている。

事業内容および進行の適切さについては、6名のスタッフへのアンケートおよびヒアリングを一覧にまとめているので参照願いたい。*資料2

事業内容については、5段階中平均4.4と高い数値となった。スタッフ間や芸術家との話し合いを通して、思考し続けることが数値に繋がっているという。ただし進行に関しては、3であった。当施設はアートコーディネーターの養成もミッションの一つであるため、企画立ち上げから広報、交渉、経理、実施まですべてを担当する。そのため、創作の内容面に時間をかけることで他の進行が遅れることもあった。今後実施していく上での課題ととらえている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

京都における創造発信拠点として着実に歩を進めてきていると考える。来年開設20周年を迎えるにあたり、芸術家の活動を多方面から支える現場として、様々な取り組みを行ってきた成果が表れてきている。特に、創作の場の提供や発表機会の提供のみならず、劇場・音楽堂等機能強化推進事業を通して、新しい意欲的で先鋭的な作品創作に取り組み、広く公開できる機会を得ることは、京都芸術センターの活動にとって重要な柱となっている。

具体的には、以下の芸術家の活躍等が見られた。一部を列挙する。

- ・安住の地：京都芸術センター制作支援事業で創作した戯曲『impedance mismatch』（作・岡本昌也）が愛知県芸術劇場が主催するAAF戯曲賞の一次審査通過作品に選出（通過作品：14作品／応募総数：109作品）
- ・余越保子：制作室支援でクリエーションされた作品は、今年10月豊岡市にある歌舞伎小屋、永楽館にてプレミアム公演が行われる、その後、下町芸術祭、鳥の演劇祭で上演され、来年度はNY公演を予定している。
- ・和田ながら（したため、粘土の味）：こまばアゴラ演出家コンクール2018参加@こまばアゴラ劇場※1次審査および2次審査においていずれも観客賞を受賞、APAF（アジア舞台芸術人材育成部門）アートキャンプ参加

また、京都芸術センターでの発表や創作が、芸術家のキャリアの中で重要な位置をしめるようになってきていると考える。他の劇場等では実施が困難な内容でも、比較的、自由度が高い環境の中で、やりかたったこと、試したかったことを実現できる場であり、その経験によりさらに大きな劇場や世界的なフェスティバル等に招へいされることを目指しており、実際にそのような芸術家を輩出することができている。彼らの活躍により、京都だけでなく日本の文化的なポテンシャルを高め、国内外にアピールする社会的な役割を担っていると考えている。*資料9

経済的には、会場の規模が大きくないのでそれほど直接的な効果は見られないが、間接的また長期的には、京都のポテンシャルを高め、観光や経済的発展に寄与していると考えられる。近年特に外国人観光客の来館も多く、バイリンガルでの広報を行い、観客の増加に務めている。具体的には、京都の芸術文化、産業、観光に関する活動を通じて市民の関心を高めその振興に寄与することに功績があったと認められ、「KAC Performing Arts Program 2018/ 演劇計画Ⅱ 戯曲創作」に参加した松原俊太郎氏が京都市文化芸術産業観光表彰（きらめき賞）を受賞した。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

京都芸術センターのミッションのもと、以下を対象にその変化をアンケート及び数値でない部分をヒアリングにて測定した。

- ① 芸術家育成 *資料3
- ② 観客・地域住民の変化（芸術への関心など）*資料4
- ③ 京都芸術センター担当スタッフの変化 *資料2

①に対しては、①気づき・刺激 ②スキルアップ ③新しいネットワーク ④新しい顧客の獲得 の4つの指標をもって、アンケートおよびヒアリングを行うことで事業終了後の変化を計測することを試みた。
②に対しては、①関心の深化 ②芸術への理解促進の二点を中心にウェブアンケートをもとに計測し、地域住民の声はボランティアにヒアリングを試みた
③は6名のスタッフに事業の目標達成度を5段階評価、ヒアリングで測定した。

本来、育成および観客・地域住民の変化というものは、短期間で瞬間的には変化しないものである。それを見据えて成果を事業実施の初期（1年後）、中期（3年後）、長期（5年後）と段階を踏んで同じ方法で測定することで変化を確認する。

今回は初期（1年後、事業によっては1年未満のものもあり）段階の達成状況を対象ごとに下記に確認する。
（ ）の数字が5段階評価の平均。データ数が多くないので若干偏りがあることは理解したうえで分析を行った。

<属性>

- ① 芸術家：18名（ダンス28%、演劇44%、音楽5%、美術17%、その他6%）
- ② 観客・地域住民：33名（20代34%、30代44%、40代6%、50代3%、60代13&）居住地は、京都府・市46%で約半分が他府県
- ③ スタッフ：男2、女4（83%が20、30代）

<事業満足度>*5段階評価

- ① 芸術家：主に変化を図るため数値測定はなし
- ② 観客・地域住民：4.4「事業の満足度」4.4「芸術家の将来性や可能性を感じるか」
- ③ スタッフ：4.4

<事業後の変化>

- ① 芸術家：事業実施後も芸術活動を100%継続している
- ② 観客・地域住民：4.27「事業後に芸術関心度が高まったか」
「事業後に創作活動をやってみたく思ったか」に対して、「既に行っている」「行いたい・鑑賞したい」が97%を占めた。内、3%ができる範囲で芸術の役に立ちたいと答えた。
- ③ スタッフ：芸術家の創作活動をいかに支援できるかといった関心が高まっているとのこと。休日に鑑賞やリサーチに積極的に参加する姿が見受けられた。

<スキルアップ><新しいネットワーク>

- ① 芸術家：
「実施後の取り組みが変化したか」変化した61%、少し変化した22%、変わらない17%
創作に集中できた分、他地域や他国で作品を上演しているケースが多い
「1年間（2018年4月から2019年3月）での批評文・メディア掲載があったか」
掲載あり67%、掲載なし28%、無回答5%
「1年間の受賞歴やレジデンス成果があるか」あり55.5%、なし45.5%
受賞ほか、ロンドンやコソボなど海外公演・滞在をあげる人もいた。
- ② スタッフ：事業後も芸術家と連絡をとったり、鑑賞したりと交流を継続している。

上記の数値に加え、ヒアリングで得た成果をもとに考察した。芸術家の事業後の変化を確認したところ、100%創作活動を継続しており、その多くが更に先へ向けてなんらか動く・拡大していく様子がみえる。またヒアリングによると、当施設での事業を実施したことで、普段とは異なるスタッフや観客に対して作品を説明したり考えたりする時間をもたせたこと、Y充分にクリエイション期間と場所が確保できたことが貴重だったと聞いている。

また観客・参加者は、京都府市外からも多く、事業後も芸術活動・創作に興味をもっていることがわかった。また多くがウェブサイトやSNSを通して情報を得ており、継続して興味を持ち続けるような事業計画と発信を、次年度以降も意識していきたいと考えている。

スタッフにおいては、事業満足度が高いことは当たり前だが、事業後にも芸術家とやり取りを継続しておりネットワークを保持している。継続して芸術家の事業後の変化を追っていききたいと考えている。

以上より、一定の目標は達成できていると考えている。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業についてのアウトプットに対しての事業の適切さ、また計画通りに進んだかについては、以下を対象に測定した。

- ・芸術家：ヒアリング
- ・担当スタッフ：5段階評価及びヒアリング *資料2

<事業期間>

- ・担当スタッフ：4

創作を中心とした内容が多かったため、期間が短く感じたと多くのスタッフが振り返った。特にテクニカルスタッフにおいては顕著で、期間は短すぎたと2.5の数値をあげた。創作面に集中するあまり広報や発信力の弱さが目立ち、もう少し長いスパンで事業を実施する見通しを立てた方がいいと感じた。これは次年度以降の課題としたい。

次に芸術家へのヒアリングから得た回答としては、多くは適切であると応えていた。あまり長くなると次に出てくる事業費との兼ね合い等もあるので、その辺りが影響していると考えられる。

<事業費>

- ・担当スタッフ：2.8

かなり低い数値となった。事業内容に対して事業費の割合が合っていないのは、恥ずかしいことではあるが開設当初より抱えている問題である。また当施設は「芸術家の創作環境支援」をミッションとしているため、設置条例上でも貸館運営をしておらず、経済効率的な意味でいうと非常に弱い。また芸術家の要望に対して応えたいという姿勢のため、見合わなくてもマンパワーで乗り切ろうとしてしまうことが多分にある。ただし、当施設におけるマンパワーは芸術家の創作を支援するうえでも重要だと捉えている。最近では、京都府外の劇場や事業の稽古や創作、リサーチに協力してほしいという国内外の芸術家やプロデューサーからの相談も多く、できる限り柔軟に応えている。事業内容に事業費が足りあわないときは、内部スタッフやテクニカルと協力し合いながら補完しようとしている状態である。

芸術家のヒアリングからは、「京都芸術センターでこれをやってみたい」と創作意欲を優先したので、予算面は特に気にしていないという声があがった。これは本当にありがたい話で、協力して下さるおかげで成立している事業は多々あるが、いい作品を生み出すためには、相当の事業費を用意していくことも大切だと痛感している。当施設のミッションを考えた際に、事業単位で成立させるのは難しいので、施設ミッションに賛同してくれる人をスポンサーとして招き入れる制度ができないかなど施設全体のなかで現在検討中である。

<事業のスムーズさ>

- ・担当スタッフ：3

公演事業は比較的高かったが、ぐっと数値を落としたのは人材養成の「Co-program」であった。理由は、公演事業における若手芸術家支援よりも、より芸術家側の視点にたって事業を協働する形態のため、企画段階で事業が明確でなかったり、進める中で判断・段取りをしていくことが多い。Co-programは、若手芸術家と計画段階も期間として計上すると、3~10ヶ月間、対話し続けながら事業の練り込みを行い実施していく。内容によっては作品深化のためのリサーチを事前に行うこともあり、対話のなかで計画を変更していくことも多い。ただしこういった変更は創作において重要であるため、優先している。

スタッフの意見に、芸術家と対話する時間が多いのでやり取りの中で信頼関係のようなものがうまれてくる、とあった。その意味では、この事業においては計画通りに進むことが良いのか否かということ、計画通りでなくなったことに意味がある、結果として作品が深まったと感じている。

芸術家からの声は特に問題はなかったとあがっている。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

地域の方々にも、京都芸術センターがどのような目的で、どのような活動を行っているのか、についての周知が進み、若いあるいはまだキャリアの浅い芸術家を支援し、何か他とは違う面白いことをやっているところであるという認識が深まりつつあると感じている。

一例として、昨年度「KAC Performing Arts Program 2018/ Contemporary Dance」の枠組みで実施した「シテイ I・II・III」は、カゲヤマ気象台の戯曲を、ダンサー、現代美術のコレクティブ等、役者等の出演者で、3部構成で上演を行ったことは、京都芸術センターならではの取組であった。多様なジャンル、多彩な人材、幅広い観客層が新しく出会う場として機能する、とても貴重な公演を実施することができた。

他、京都芸術センターが位置する近隣の声としてボランティアスタッフや地域住民の声をあげる。また芸術分野全般において、京都という地域の中で京都芸術センターが担っていることとして芸術家からの声をあげる。*資料5には名前明記

以上より、京都芸術センターが今どのように機能しているかが伝わればと思う。

<地域>

・ボランティアスタッフ（80代男性）

開設当初よりボランティア活動をしている。京都芸術センターはさまざまな分野や形態の催しがあり、たくさんの変わった人やアーティストと出会う。私はセンターで出会ったダンスを通してダンサーとしても活動してきた。ここ数年、体調が悪く活動がままならないが、家と京都芸術センターが居場所であり、大切な空間だ。ボランティア企画として京都芸術センターで近々、生前葬をしよう企画している。

・小学校地域の方（8歳男性）

夏休みにラジオ体操で京都芸術センターに来たら、グラウンドに急におもしろい滑り台や木の建物ができていた。学校の友だちを連れて、昼から遊びにきた。夏休みが終わって学校が始まったけれど、学校よりもここは20:00まで遊べると聞いて、この遊び道具（実は作品です・・）がある間は何度も何度も遊んで楽しかった。大人も遊んでいた。

・町内会長

地域がだんだんと高齢化してきた。文化祭や運動会、盆踊り、お花見など地域行事も数多くあるが、京都芸術センターのスタッフは皆喜んで参加してくれる。また若い芸術家（時々海外の人も！）やスタッフも一緒に運動会に参加してくれるので、活気がある。地域の大切な一員だと考えている。

<芸術家>

・劇作家・演出家（東京在住）

過去3作品、すべて京都芸術センターで上演させてもらった。また2018年度のCo-programでは通常の劇場ではできない形態の演出を受入れてくれ、実施することができた。2019年度は新作に取り組むにあたって予算はないながらも、リサーチやオーディション等、柔軟に幅広く対応してくれる。組織一辺倒でないスタッフも魅力的である。京都芸術センターという創作拠点があることで、全国、いや海外のアーティストも助かっていると思う。自身も拠点を聞かれると東京であるが、京都もあげている。新作は当分、京都で発表していく予定だ。

・プロデューサー（東京在住）

新作をつくる際、クリエイションの多くは京都芸術センターを稽古場として利用している。発表する劇場は数多くあるが、創作できる場所は限られている。公演を実施するという事は必ずどこかで長期間かけて創作が行われている。ただ現状としてその認識が低いから、京都芸術センターのような場所が増えていかないのだと思う。もし、ここがなくなってしまったら、アーティストにとって創作環境が失われ、多大な損失になると思う。予算はあまりないですけどね…とスタッフがいながらも柔軟に対応してくれる姿は本当に有り難い。

・ダンサー（京都在住）

若手芸術家を支援する京都芸術センターは、20、30代のダンサーと今後のコンテンポラリーダンスの未来を考えていくようなシンポジウムを行ったり、試演会をみた観客が意見を言いやすいようなグループワークを行ったり、批評チームを別でつくったりと、あらゆる工夫を凝らして私たち20代でも参加しやすい場を用意してくれる。特にここは劇場ではなく、制作室（稽古場）と発表する場があるので、アーティストの人脈が繋がっていて誰かを紹介してもらえたりと何かと繋がる可能性がある。

・音楽家（京都在住）

「～したいんですよ」と私が話を始めると、京都芸術センターのスタッフはいつも熱心に聞いてくれる。そして少人数で動いているので、真夜中も仕事をしている姿をみるとこの人たちは狂っていると思う。そして頑張っていることを外へ出したり、アピールするのがとても下手なので、海外の若い音楽家を見かけたら、日本のアートセンターとして京都芸術センターを薦めている。

・作曲家（東京在住）

一定の成功が当たり前求められる今、芸術家側の可能性を信じて創作につきあってくれる施設はめずらしい。芸術家としてはその姿勢はありがたいと信頼をおいてやり取りしていくことができる。この関係性を可能にしてくれているのが京都芸術センターだ。ちょっとおかしな表現や心底悩みながらでてる創作は、ここで時間をかけてやりたいと思う。海外のアーティストがレジデンスしている気持ちもよくわかる。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

2017年度から「Co-program」というプログラム（*資料7）で、さらなる活動の発展が期待される芸術家と共に作品をつくる、あるいはリサーチを行うという事業を実施している。作品の評価は高いのに制作的な支援が足りず観客が増えない、あるいは、ある程度の観客はいつも来てくれるがこれまでとは違ったアプローチで作品作りを行いたい等、創作活動における問題点や課題を、共に話し合いながら創作を行うことで、これまでになかった作品を発表することができた。それらを通して、次なるステップへとつながる成果として以下のものがあった。

一部を列挙する。

- －上田誠「来ててつかるべき新世界」第61回岸田國土戯曲賞を受賞 *制作室
- －岡崎藝術座「いいかげんな訪問者の報告（アサード・おにぎり付き）」*Co-program
→メルボルンにて2020年度公演予定
- －神里雄大「バルパライソの長い坂をくだる話」第62回岸田國土戯曲賞を受賞 *KEXIにて上演
- －松原俊太郎「山山」第63回岸田國土戯曲賞を受賞 *演劇計画Ⅱ

また、「フィリップ・ドゥクフレ ダンス・ワークショップ」など、世界的に活躍するダンサー、振付家を招くことができたことで、若手ダンサーや振付家から「ダンスを始めるきっかけとなった憧れの人のワークショップを受けることができ感激した」等、今後の活動の励みとなる刺激を与えることができたと考えている。

地域ということで、少し視野を広げると、当施設で十数年継続して実施してきた能の「素謡の会」は、2018年度をもって一旦終了とした。理由は、30,40代の能楽の観客拡充がある一定数、達成できたこと、また京都のカンパニーである「地点」から相談を受け「観劇観能エクステンジプログラム」を開始したことで、そのノウハウやネットワークをそこに託したためである。京都芸術センターが全てを実施するのではなく、演劇においてまた別の視点から地点が能を捉えていく、アンダースローでその文化が芽吹いていくということはずっと目指していたことだったので嬉しい出来事となった。

また、近隣の京都の芸術系大学や舞台芸術研究センター、劇場、ギャラリー、新たにオープンした民間劇場などとも連携し、現場間のネットワークを保持・拡充しながら、アーティスト支援につとめている。それぞれの施設ミッションを踏まえたうえで、アーティストから相談がきた際に、それぞれに連絡をとり支援にあたっている。各施設という考え方から、徐々に京都としてアーティストを受入れる、といった体制をつくっていきたいと考えている。

最後に、京都芸術センターにとっての第一の観客でもあり、ファンでもあるボランティアスタッフは、継続的に増加傾向にあり（平成31年3月末現在で443名の登録）、彼らの活動を通して芸術的関心の広がりを実感することができる。勉強会や鑑賞ツアー等、ボランティアスタッフの自主的な活動も活発であることから、京都芸術センターではその文化的芸術的活動の支援も行っている。特に彼らは、京都における文化活動のコアになる人材でもあり、ここを出発点に、他のフェスティバル（KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 やKYOTO GRAPHIE 京都国際写真芸術祭等）でのボランティアあるいは運営スタッフとしての活躍も目覚ましく、京都芸術センターでの活動が、芸術文化活動へのゲートウェイとして機能していると考えられる。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

京都芸術センターのもう一つの重要なミッションである、芸術家を支えるアート・マネジメント人材育成、アートコーディネーターである。

アート・コーディネーターは、3年間勤務した後、以下の劇場や美術館、大学等でその後も継続して活動しており、日本全体のアート・マネジメント人材養成機関としての役割の一部を担っていると考えている。現在、41名を輩出し、90%以上が現在も芸術文化に係る分野で働いている。 *資料6

- ・ ロームシアター京都
- ・ 京都精華大学
- ・ 京都国立近代美術館
- ・ 山口情報芸術センター
- ・ せんだいメディアテーク
- ・ 京都府京都文化博物館
- ・ 静岡大学
- ・ 青森県立美術館
- ・ KYOTO EXPERIMENT
- ・ 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
- ・ 国立国際美術館
- ・ 京都市美術館
- ・ びわ湖ホール など

京都芸術センターでの経験、人脈等を活かし、その後各地で芸術文化を支える人材として機能している。また勤務後もプロジェクトで別組織として共に取り組むことも多く、各地の文化事情や取り組みなどを情報交換し、かつ協力しあうなかで今の芸術文化に取り組んでいる。

また、京都芸術センターは、京都で芸術文化を支える人材のネットワークである京都文化芸術コア・ネットワークの事務局を務め、京阪神劇場連絡会のメンバーとして、またレジデンスの世界的ネットワーク「ResArtis」の年次総会をホストするなど、国内外でのネットワーク構築に務めている。

京都芸術センターはさまざまな事業を実施しているが、すべてにおいてプロセスを重視している。芸術家が求めていること等は、担当ではないスタッフとも常に情報共有し、事業部門だけでなく管理もあわせて組織全体で芸術家とその創作を受けとめられるよう努力している。30年度よりも次年度はさらに、芸術家との対話やリサーチ、どのように連携させていくか等に力をいれていきたい。また、目の前の仕事を効率よく取り組むことも大事だが、芸術家や創作に対してきちんと向きあえる、その為の知識をもち、また時間とエネルギー、（可能な限り予算も）をかけ続けられる組織でありたいと思っている。